

2022年1月

課題本 『生きて帰ってきた男』

—ある日本兵の戦争と戦後—

小熊英二/著 岩波新書 2015年

講師 吉川五百枝

本が本の記憶をよび寄せることがあります。

抑留の体験記録かなと思ひながらページをくりはじめてすぐに、体験者小熊謙二氏(1925～)が、北海道常呂郡佐呂間の出身だと書かれていて、ドキンとしました。もちろん常呂といえばカーリングの町というのがありますが、それよりも、栃木県谷中村の足尾銅山鉍毒被害者が集団入植した地名として記憶にあったからです。

この読書会の2018年12月『生きるこだま』(岡部伊都子著)に続く学習会としての1月に関連本として『谷中村滅亡史』(荒畑寒村著)を選びました。岡部氏推挙の荒畑氏は、悲憤慷慨の口調で、栃木県谷中村を中心にした足尾銅山鉍毒事件の結末が、北海道の佐呂間に入植することで幕引きになったと語っています。1907年、鉍毒被害で住めなくなった谷中村の一部の人は、「土地収用法」によって家屋土地を強制買収され、北海道サロマベツ原野の開拓に苦難の歴史を刻みます。反対すれば「国賊」と呼ばれた谷中村の人々。公害問題だけではなく、政治姿勢の問題として記憶される必要があります。

小熊謙二氏が、ソ連軍の捕虜になりシベリアの荒れ地に立ったのは、1945年20歳の時。政府や軍部の政策に反対すれば、「国賊」とか「非国民」とかと呼ばれる締め付けは、日清、日露戦争から日中戦争、満州事変、第二次世界大戦へと続いていたのだと、前月の例会で『それでも日本人は戦争を選んだ』(加藤陽子著)で読んだばかりです。加藤陽子氏は、幕末から第2次世界大戦までを、数字や残って居る文書を引きながら俯瞰的に述べました。その数字の中の「1」を形成した個人である小熊謙二氏に密着して書かれているのが今月の課題本です。上空を飛翔しながら眺めていた鳥が、急降下して地上に降り立って見るような景色の変化だと感じました。

1945年は、人類がはじめて原爆という非情な手段を戦争に持ち込んだ年として、また、満州からの引き上げやソ連に抑留された年として、それぞれに思いの違いはあるでしょうが、共通しているのは「敗戦」によって生活が一変したという身近な体験だろうと思います。

小熊謙二氏もそうでした。19歳で召集令状が届いた時点で、“戦争を選んだ日本人”になりました。応召拒否など思いもしなかった青年です。

(情報がろくにないから判断力も無い)文中にそう記されています。

今だから当時のソ連軍の満州への侵攻も、連合国側の密約で侵攻はあり得ると読めます

が、1945年の日本人庶民は、8月8日のソ連の中立条約破棄など想像もしていなかったでしょう。敗戦当時、満州に居た日本民間人は約150万人、関東軍兵士は約50万人とされています。そのうち、約63万人が抑留されたとのこと。

軍部も政府も、戦争拡大に走る日本の選択が凄惨な結末を導く予想を隠蔽していました。あの日清戦争も日露戦争も、提灯行列をし、万歳を叫んだ日本人庶民だったので、為政者による染脳は容易だったでしょう。

シベリア抑留の体験は、色々な人によって語られています。この中にも書いてありましたが、人によって受け止め方や感慨が違います。ソ連軍の満州侵攻は、日本人には「被害の国民的記憶」として語られると指摘するのは加藤陽子氏です。

どなたのお話も、立場によって耐えがたさが異なりました。『人間の条件』（五味川純平1960年刊）の過酷な記述も、作者の実体験を背景にしています。それでも体験者の小熊謙二氏は、「あんなものじゃない」と言われたそうです。生きて帰った人でもそうなのです。まして亡くなった人は、どれほどの思いをしたのでしょうか。〈恐怖に近い寒さと空腹、栄養失調、疲弊、まともな感性ではなく、ただ生きていくのに必死だった〉この言葉は、抑留生活経験者の共通言語だったようです。

今回の本は、シベリア抑留の個人的体験記というわけではなく、昭和の年号の始まりの年に生まれた小熊謙二という一人の日本人の一生を追ったものなので、シベリア抑留体験を含んでも、淡々と時間が流れていきます。戦前の細々した生活物資の値段や状況を示しながら、統制経済のもと、流通が滞り物資が不足していく敗戦時の暮らしの様子も、感情の吐露もなく冷静な筆の運びで進みます。ちょうど、何が起きようと、カチカチカチカチと時を刻む秒針のような筆致だなど思いました。この本の著者である息子の英二氏が父親のことを〈淡々とした性格〉と書いて居るのも、そうかもしれないと思います。秒針の音は、〈自分の経験した戦争の事実について一貫して関心を抱いていた〉謙二氏の心底に続く音でしょう。戦争と軍隊でひどい目に遭った。それを怒ることも知らなかったと冷静に語りますが、帰還兵の消えない記憶を感じます。

加藤陽子氏はデータとして上がる数字や文書を基に日本政府の動向を鋭くつき、小熊謙二氏は、高度経済成長に沿いながら20代の10年間に9回の転居10回の転職を経験する一人の生活者として暮らしの変化を語ります。

北海道で生まれ、東京、満州、シベリア、新潟、そしてまた東京という居場所の移動、それにシベリア抑留と結核療養所入所という長期間の拘束状態。題名の「生きて帰って来た男」は、シベリア抑留からの帰還だけではなく、様々な難関をくぐりぬけ生き延びられたことも意味しそうです。一人を描きながら、社会を写し取った膨大な事象の詰まった作品でした。

そして、この3月の今、連日メディアが報道するのは、ソ連によるウクライナ侵攻の様子です。ソ連軍に攻め込まれて地下に逃げる人々。防空壕も警戒警報のサイレンも負傷する隣人のうめき声も、3歳だった私の実体験そのもの。あれから77年たった今、同じ光景をまた見ているのです。

「戦争」にどれほどの言い訳や正当性の主張があろうと、それらは武器を持つ理由にはならない。染脳された私たち同士が、武器を手にしても、結局何も解決しないからです。

世界中が、やきもきしています。

『生きて帰ってきた男』を読んで

◆【 YA 】

著者英二の父謙二の徴兵、シベリア抑留、帰国、そして晩年までの詳しい記録的な本。戦争、抑留等、戦時そのものの体験記録的なものは、帰国出来た人によって、たくさん発表されている。自らが体験した無意味な命をかけての戦いは、辛うじて帰国出来た人の真実だと思う。この本は、帰国後の謙二の生き方がメインとなっている。戦後を一般の人がどのような生活をして人生を送って来られているのか、生活状況が詳しく語られているのは初めて読んだ。その時、その時代の背景の流れや環境、思いもしなかった病気と闘病。職を転々とし乍らも生活を築いてゆく謙二。私が印象深かったのが、退職後に社会運動にも身を投じ、戦後補償裁判を起こしたこと。

謙二のようにしっかりと生活を送られた人がいる限り、その反対に戦争での体験が災いして、うまく乗り切れなかった人が必ず沢山存在したことは間違いないと思う。

戦争はいつでも民間人が知り得ない裏で起きている。そしてその民間人が犠牲となっている。即ち民間人一人一人の人生が国の力によって翻弄させられ、消えていることになる。戦争の正体とは一体何だろうか。

◆【 K子 】

抑留生活という言葉聞いた事はあるが、活字になると想像を絶する。それにしても苛酷な条件の中で生き抜くことの出来る人間の強さ。何故に？生きて日本に帰る！この一念のために…。生活の具体例が書かれているので実情がありありと理解出来た。

上から下へ言われるままの生活…かくも人間は考慮・志向を失うものか。いやし(煙草)を与え抵抗する考えを削ぐ。不必要なものを与えるには理由があった。怖いと思った。それにしても作者の記憶の確かさに、ただ唯驚く。